第４章

「中途失明者の点字指導に関する学習会」の報告

学習会の趣旨

「中途失明者の点字指導に関する学習会」を立ち上げた理由は、第１に指導の実践的な場で活躍している人たちの声を研究に反映したかったこと、第２に、参加者同士の情報交換や連携のきっかけ作りをしたかったことにある。この学習会での対象者は、中途失明者の点字指導にかかわる盲学校及び関係施設の職員等であるが、今まで同じように中途失明者の点字指導にかかわりながら、特に盲学校とリハビリテーションセンターや点字図書館等との情報交換や連携ができていなかった状況があった。

以下に学習会での趣旨説明資料を示す。

「中途失明者の点字指導に関する学習会」開催の経緯及び趣旨

「人との出会いが力となる」

この学習会は、中途失明者の点字指導に関わっている人たちが集い、点字触読能力を高めるための指導法や教材の工夫等について、共に考え、深めていくという趣旨で開催いたしました。今まで同じように中途失明者の点字指導に関わりながらも、あまり交流のなかった盲学校やリハビリテーションセンター、点字図書館の方々との情報交換の場となればと考えています。

この会の背景には、科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「中途失明者の個に応じた最適点字サイズ評価と点字触読指導プログラム及び教材の開発」（平成 13 年度～平成 15 年度：研究代表者澤田真弓）という研究があり、学習会はその一環として行うものです。この研究の目的や具体的な取り組みについては、（図１）の通りです。この研究を進めるにあたり、多くの方々との出会いがあり、共に推進していく仲間の輪が広がりました。日本盲人社会福祉施設協議会においても、中途失明者の点字指導法の確立を目指して、研修会等の取り組みをされており、この研究へのご協力をいただいております。

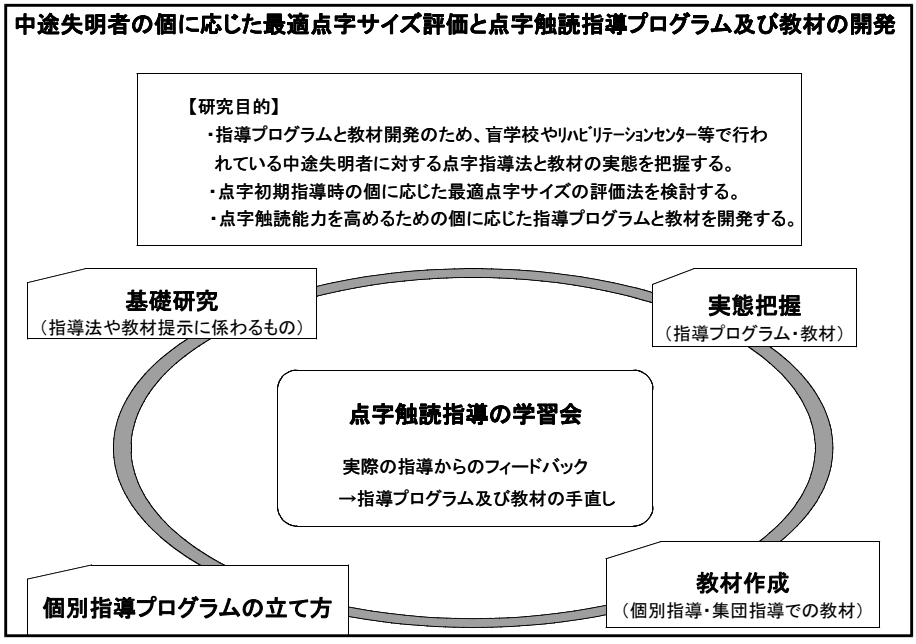


図１　研究の目的及び構造図

年１回、計３回の学習会を通して共通していることは、演習として、実際に指導者や生徒役になり指導法を検討していくこと、またナイトセミナーという時間を設け、小グループに分かれて、それぞれのテーマにそって意見や情報を交換しあい、最終日に、それぞれのグループで話し合われたことを全体で報告し、それらを共有するという、参加型の学習会であることである。

以下にナイトセミナーでのテーマ資料を示す。

ナイトセミナー

日頃、思っていることを大いに語ろう！！（グループ討議）

ここにお集まりの皆さんは、職場はそれぞれ違いますが、中途失明者の点字指導について真剣に考えている仲間です。この時間は、各グループごとにテーマに沿って話し合っていきます。さまざまな職場の方々との情報交換の場と考えています。事前アンケートにて、ナイトセミナーで話題にしたいことをお聞きした結果から、次のようなテーマ設定いたしました。

＜話し合いのテーマ＞

１．個別指導プログラムの立て方

・指導前のアセスメントのポイントは？
・指導目標・指導内容・指導期間等はどのように決めてるの？
・疾患や年齢によっても違ってくるし進路等によっても違うよね･･･。
・どんな書式を使ってるの？
・指導後の評価は？そのあとはどうしてる？

２．指導法・教材の工夫

・点字学習を継続していくのって大変じゃない？
・モティベーションを高めるためのアイディアは？
・どんな工夫をしているの？（集団指導・個別指導）
・あったらいいな、こんな教材！
・独自の指導法や教材がある？その特徴は？
・大きい点字は読み易い？
・点字サイズ、点間、マス間、行間を変えたら読みやすいのかな？

３．その他

・障害受容とも係わって、精神的にどのように支えていく？
・点字指導で悩んでいる事･･･
・こんな事例があったんだけど･･･
・指導者養成はどうしていく？
・支援費制度がスタートして､点字教室の運営にも係わって、ちょっと困ったことがでてきてるんだけど･･･。

第１節　第１回学習会の報告

１．期日　平成 14 年 3 月 16 日（土）～ 3 月 17 日（日）

２．参加者　６４名

３．内容及び日程

3 月 16 日（土）

13:30 ～ 13:45	受付
13:45 ～ 14:00	開会式
14:00 ～ 14:15	学習会趣旨説明
14:15 ～ 15:15	点字指導について（講義）
15:15 ～ 15:30	休憩
15:30 ～ 16:10	点字を読んでみよう
16:10 ～ 17:30	まずは体験してみようⅠ
17:30 ～ 19:30	夕食・休憩
19:30 ～ 21:00	ナイトセミナー（グループ討議）

3 月 17 日（日）

7:00 ～ 8:30	朝食　休憩
9:00 ～ 10:45	まずは体験してみようⅡ（演習）
10:45 ～ 11:00	点字を読んでみよう
11:00 ～ 11:15	休憩
11:15 ～ 11:50	グループ討議報告及び協議
11:50 ～ 12:00	閉会式

１．「点字指導について」講義記録

講義者：原 田 良 實 （名古屋市総合リハビリテーションセンター）

一昨年リハ部会で講習をおこなった。テキストは一昨年使ったものに手を加えたものである（中途視覚障害者点字指導担当者研修テキスト「点字指導マニュアル・教材」日本盲人社会福祉施設協議会リハビリテーション部会編)。これをこのままではなくみんなで考えてまとめていきたいと思う。リハ部会で研修をおこなったとき次をやりたいと考えた。施設の集まりとは別に学校も含めて視覚障害者に関わる人すべてでできればと思っていた。多くのメンバーも集めて今日の会を開くことができた。

資料は昨日できて自分で運搬した。このテキストで全てではなくこれからいいものにできるように考えていきたいと思っている。

内容について説明する。

リハの職員は専門職だが､点字指導をおこなっているのはボランティアであったりする事が多く、点字の技能については学んでいるが視覚障害者の問題やたどっていく道筋や解決しないといけない課題を体系的に学んでいるわけではない。それで、中途で視覚に障害を持つということはどういうことかを記録を抜き出して書いている。そのあとに動きや､「喪失」から参考になる部分、そのあとに触覚、点字を読むこと書いている。ここでまず、触ってわかるということのすばらしさやすごさについて書いている。そのあとに点字について書いているが、点字の与えられ方は大切である。多くの中途視覚障害者はできれば点字をやりたくない、自分の視覚障害を拒否するからである。

中途失明者が点字を学ぶこと、使えるようになることは大変な道筋だが、どうやったら負担を少なくすることができるかを考えたことがあるだろうか。それをもとに新しい生活を組み立てることができるレベルにできるだろうか。私たちは取り組みが甘かったのではないだろうか。中途視覚障害者に関わるこういう学習会が今までおこなわれたことがあるだろうか、点訳の講習会は数多くされているがこのような点字指導の講習会は今までになかった。視覚障害者になればすぐに点字を読めるわけではない。点字指導の現状を調査して驚いたのは、点字触読を指導者が実際に学んでいない。指導しているのと同じ状況を自分で経験していない。また、目の見える職員やボランティアがだれも触読できないという現実がわかった。さらに、点字を習得できない要素を触知覚や意識の低下とみている回答が多い。中途で点字が必要になった視覚障害者が点字を習得するのは大変なことだとわかっているのに､指導する側が視覚障害者に責任を求めているということはいかがなものか。

私自身の中では、点字の読みの習得を困難にしているのは、指導法に原因があると思っている。それをきちんとできたら、中途視覚障害者が点字を読む困難さが軽減できる。私がやっている指導法は、これまでやってはいけないと言われてきたことである。これまでの呪縛から逃れても良いのではないかと思っている。みんなで検討を重ねて新しい道筋をたどっても良いのではないかと思っている。点字指導の資料は少ないが、これまでの点字指導では､「点字学習の手引き」が参考にされることが多いが、その呪縛から逃れての良いのではないかと思っている。これをこの２日間で学んでほしい。

点字を読むために問題になるのは、大きく分けると３つある。まず、触知覚の問題。これは点の認知力の問題になる。年齢や糖尿病だとか緑内障など疾病で差がある。この差が点字を学ぶ差になる。これはある程度、他のことでカバーできるのではないかと思っている。それは、触運動の問題である。触運動で触知覚を補える。

どういう運動をするかというと、熟練した人では指が横に動いて、入門当時は上下運動が頻繁である。しかし、読めない綴りなどを丹念に触るときには、慣れた人でも上下運動がある。点字にいつも触っている人ならうなずけることだろう。１字１字を読みたいとなれば上下運動になる。上下運動がいけないと言うのは誤解である。通常、点字指導をしようとする場合、モデルはよい読み手で速い読み手だ。その人は上下に動かさない。それを見て呪文のように上下に動かしてはいけないと思いこんでいる。でも、上手に読める人でも、よくわからないときは指を上下に動かすのであって、初心者が縦に動かして点をわかろうとすることは当たり前。その方がうまく読める。それを点字指導に取り入れて、ある程度は、その方法で進める方がいい。指導を始めた頃のことだが、若い人で知覚がいい人は縦に動かさなくても読めるようになった。しかし、読めないケースにあたって、困ってしまって試しに自分でやってみると縦に動かさないと読めない。どうやったら自分が読めるかというと縦に指を動かすことが必要だった。

２点間の弁別域の問題はあるが、点がわからなくても、点か棒か、「あ」か「う」かわかればいいと言う考え方。それを三回やると一文字読めるのではないかという考え。もっと大事なのは、一文字読んで次に移るのがきちんとできると良い、それは指に一文字がきれいに収まっていなくてはいけない。オプタコンの指導ではやっていたことですが、点字指導では、視覚障害者が指をきちんと次の文字に移るようにする指導、ずれていないというチェックをする指導がされていない。一文字分きちんと動いているかどうか、５０歳代の人にはなかなかわからない。読めるようになったあとだったら指がどこにあってもわかる。そんな考えにいたって指導を行っている。今日からの演習で実際にやっていただくわけですが、スタッフにも手伝ってもらって読みやすさを実感してもらおうと思っています。

今回のテキストには縦読みの指導法と演習のカリキュラム、教材も載せている。

教材をどのように作るかは大きな問題。アンケートを見ても教材の文字の提示は５０音順でやっていることが多い。これは、書くときは良いが読むときには母音と子音の組み合わせで点を探しに行くと、触読では読みにくくなる。また、点字には読みやすい形と読みにくい形がある。点字は形で覚えていくことが大切である。やさしい形。難しい形、特徴のある形を混ぜて覚えていった方が良いということも５０音順にしない方が良いという理由の一つである。

１回の学習における新出文字について、何文字が良いかというと、たくさん出さない方が良い。それで今回のテキストでは１ページ１文字という教材を作った。点字の習得が何回で終わるかということも予測もできる。これは指導の計画を立てる上で役立つ。しかし、毎日やれる施設と週１回しかできないところでは状況が異なる。最初の指導で８文字覚えて、その後指導を続けていくわけだが、点字の触読は半年以内ぐらいで習得して欲しい。そこで、今回は１ページに新出文字が２文字の教材を作ってみた。触読を軸にして考えると、出てきたものの名前を暗記していくことが役立つ。教材の順番を覚えながら、指で覚えた点の形に名前を付けて、点の形を覚えながら定着させていくということになる。「れ」は「田んぼの田」と指でとらえていい。決して「え」に５点ではない。触ったときに点の形をどんな形でとらえたかが大切。その人がとらえた形を尊重して、今まで出てきた字との違いがわかると良い。「ん」はどんな字かというと、上にさわらなくて下の方だけと覚えればそれで良い。今まで出てきた字との違いだから、上がなくて下だけと覚えればそれで十分。

もう一つは、点字と言葉を結びつける指導であるということを踏まえることが必要である。言葉を知っていることや文章を読んだことがあることを最大限利用して、３文字の言葉は真ん中を推測しても良い。雰囲気で読んでも良い。予測、推測を大切にする。触知覚の悪さを触運動と読書の力で補う指導が必要だと思っている。

点字指導を行った結果、実用的に読めるということをどう考えるかだが、１ページを１５分以内と考えた。訓練を行った結果１／３の人ができるようになっている。これをいかに短くしていくかが大切。

情報処理試験を受けたり司法試験に挑戦したりするために点字に挑戦する人もいる。点字が読めるようになって読書が楽しいという人もいる。中途で文字を失った人たちに文字を取り戻してほしい。点字で文字をとりもどすことは大きなリハである。

（文責：吉田道広）

２．ナイトセミナー（グループ討議）の記録

＜A 班＞

話し合いの突破口として、「指導法・教材の工夫」についての情報交換からスタートした。

1　触読の手はどのように指導しているか？

（1）学習者の負担を少しでも軽減するために、左右どちらでも読みやすい手を使うように指示。

（2）盲学校教育の中では、左手で読み、右手で書く、つまり、転写の効率性を強調。将来の学習手段として点字を習得しようという場合は、左手で読むように指導したほうがよいのでは？

（3）点字学習の目的によって、柔軟に考えていくべき。基本的にはどちらの手で読んでもよいと思うが、左手読み、右手読みのそれぞれの利点を学習者に説明して、本人に選択を委ねている。

2　教材の工夫は？

（1）初期段階における文字導入の場面では、ピンを挿して点字を形作る教材や学習具、立体コピーなどを用いて、点字の形を納得のいくまで触るチャンスを提供。

（2）触知覚には個人差があるので、初期評価で簡単なテストを行い、ケースによっては、パーキンスサイズの教材を提供（スタンダードは日本サイズ)。

（3）教材の点字サイズについては、大変迷っている。トレーニングの段階で、大きいサイズの点字を提供することが、日常生活においてスタンダードのサイズの点字に適応していく妨げにはならないのか？

（4）トレーニングの初期段階で大きいサイズの点字を導入、その後、触読になれてきたところで、スタンダードサイズに切り替えて、成功したケースが何例かある。

3　点字学習を精神的にどのように支えていくのか？

（ここで、盲学校の理療教育現場での、中途視覚障害者の不適応の事例が語られた。）

（1）点字が読めないまま入学してくる生徒が多い。その事が直接的・間接的に不適応の原因になっていると思われる。就学前指導の必要性。

（2）就学前指導の役割は、どこが担っていくのか？

（3）地域のリハビリテーション施設、情報提供施設、盲教育施設の連携が切望される。この３者の協力体制が確立できれば、中途視覚障害者に自立のきっかけを提供する機会は、現在より増すであろう。リハビリテーションの思想を広める必要がある。

最後に、本学習会に期待する事として、次のようなポイントがあげられた。

（1）実線（演習）を観察することがなによりも意義深い。

（2）単発ではなく、継続的に学習会を積み重ねることが重要→地域へ広げていく。

（文責：松谷詩子）

＜B 班＞

１．参加者の構成

盲学校教諭・寄宿舎指導員……８名　北海道高等盲学校、岩手県立盲学校、宮城県立盲学校、奈良県立盲学校、大阪府立盲学校、鳥取県立鳥取盲学校、徳島県立盲学校、佐賀県立盲学校

リハビリテーション関係施設……３名　全国ベーチェット病協会、京都ライトハウス鳥居寮、光道園

情報提供施設……２名　豊島区立中央図書館、石川県視覚障害者協会

ボランティア……１名　山口県宇部市

事務局……２名　　日本ライトハウス、静岡県立大学短大部

２．内容

２班では、主にアセスメント、指導上で利用している、あるいは工夫している事柄、導入している学習用テキストの３点について意見交換を行なった。

(1)アセスメントについて

点字学習におけるアセスメントには、導入前の「初期評価」と導入後の各段階での習得状況についての評価がある。初期評価については、リハビリテーション施設の場合、その実施が見られ、盲学校ではほとんどが行なわれていない状況が報告された。評価を行なっているリハビリテーション関係施設の場合、評価内容については、施設によって異なるが、多くが面接のみで、学習者に関する情報・状況、学習の目的などを把握するためのものになっている。その中で京都ライトハウス鳥居寮では、面接や学習者の指先の状態チェックのほか、既にある程度の点字学習の経験を持つケースに対して、読み速度、書き方チェックなどを行ない、学習を進めていくうえでのクラス分けの参考データとしていることが紹介された。また日本ライトハウスでも、面接により点字学習の目的を確認し、学習経験者にはその達成状況を把握するための評価をしているとの報告があった。盲学校では、奈良盲学校が感覚機能のチェックなどを初期評価として実施していると紹介した。

導入後の評価については、京都ライトハウス鳥居寮、鳥取盲学校で各学期ごとに行なっているとの発言があった。鳥取盲学校では、読みに関する評価に留まらず、書き方におけるわかち書きについても行なっており、内容の濃いものとなっている。また佐賀盲学校では、かつて毎月評価を実施していたが、現在は残念ながら実施されなくなったと言う。

(2)指導上で利用している、あるいは工夫している事柄について

どの施設にも、点字の学習において日本の通常サイズの点字を触読するには、厳しいケースがある。そこで、学習に当たっては各施設・盲学校で教材に工夫や配慮をしている状況が報告された。

導入時、日本の標準サイズの点字は避け、パーキンスブレイラーで打ち出した点字を使用しているとする盲学校やリハ施設・情報提供施設は多くみられた。このほか全国ベーチェット病協会では、ジャンボブレイル(*1)を、豊島区立中央図書館ではラージ点字(*2)を利用することもあるとの発言があった。触圧の強いケースには、サーモフォームで教材を用意する施設もみられた。点字のサイズを意識し、それに基づいて点字プリンタを購入した施設もある。点字サイズが日本のものよりも大きい点字プリンタとして、バーサポイント、エベレスト、ＥＴが紹介された。

点字の構成、文字としての形体の理解を促すために、学習具（日点用具課取り扱い）や点字マスコット（別名：点字キーホルダー、同)、タックタイル（フランス or イタリア製)、アクセサリー

シールなどを利用しているとの紹介が各実施施設からなされ、関心を呼んだ。また岩手盲学校からは、アクリル板を用い、独自の教材を製作した旨の報告があった。

*1　パーキンスブレイラーを用いて打ち出す点字。通常のパーキンス使用では、Ｂ５の用紙の場合、左マージンを最大にすると 1 行に 27 マスの印字となる。これに対しジャンボブレイルは、同 17 マス程度となるらしい。

*2　仲村点字器製作所が発売しているもの。1 行 32 マスの通常の点字の点間・マス間の割合をそのまま維持して広げた点字器。従来の点字器に対し、1 行 27 マス、1 ページ 14 行となる。日本点字図書館では、中途視覚障害者のためにこの点字器を用いた点訳書を少しずつではあるが制作し、Ｌ点字図書として紹介している。

⑶使用テキストについて

盲学校では、多くが文部省の『点字学習指導のてびき』を使用していると報告した。一方、リハビリテーション・情報提供施設では、ほとんどがオリジナルのテキストを作成し、使用していると発言した。石川県視覚障害者協会では、オリジナルのものと名古屋方式の 2 種類を備え、ケースに応じて使い分けている。

オリジナルのテキストを作成している施設には、その構成や特徴を紹介していただいた。日本ライトハウスの場合、点字の１マスの間隔、マス内の点のある・なしをしっかりと理解してもらうためのページから始め、この定着の後、五十音の学習に進む。また京都ライトハウスでは、導入から一定の段階まではサーモフォームを用いたテキストを使用し、繰り返しの学習での磨耗を抑えている。内容的には、点字の１マスの感覚の理解、点たどり、五十音と進んでいくという。

３．補　足

以上の後、話題は点字学習における動機付け、励まし方、盲学校における指導体制のあり方などについて移りかけたが、時間切れとなり、その提起で終了した。

（文責：立花明彦）

＜C 班＞

テーマ：個別指導プログラムの立て方等

１．目標

・成人や高齢者は目標も多様　例）理療を目指す　盲学校入学　無目的　到達度が違う。

・訪問指導も行っているが、近所には知られたくないという人もいる。（大阪府）

２．指導状況

・中途失明者の点字指導は理療科教員が行っているケースが多い。

・全校でのマニュアルがある。（岡崎盲）

３．プログラム

・プログラムとして記述しているところはないが「５０音の読み→書き→読み書きの繰り返し」というやり方をとっている。

・教員向けの研修プログラムはある。（横浜市盲の例）

４．指導前アセスメント

・事前の評価は入試の段階でみる。（栃木盲）

・学校全体での取り組みは少ない。

・入学前の指導の取り組みもない。

国リハの事例

５．他分野との連携

・眼科医、リハ施設との連携が重要

・ピア・カウンセリングの導入

◎指導方法の確立、課題の開発、指導システムの整備が必要であるという意見が多数。

テーマ：指導法・教材の工夫

１．意欲を高める工夫

・教材によるところが大きい→適当な教材が欲しい。

・自分からやりたいという気持が動かないと難しい。

２．指導法

・古い教材を用いているが、５０代の方　週１時間の指導　３０～５０字／分は読めるようになった事例（岡崎盲）

・１２分／頁程度で読めれば優秀な方だ。（千歳市図書館）

・触読の困難な人にはパーキンスを用いて指導。

・形態読みの指導、縦読みの指導、継時的読みの指導、それぞれの利点を活かしていく方法はとれないか。

３．教材

・対象者の年齢、障害の程度に応じて手探りで作成しているのが現状。

・教材はあるが更新されていないという学校が殆ど。

・点字を読むだけでなく、内容も楽しめる教材があればという意見。

・導入教材の重要性

・歌詞や流行り言葉、成人図書からヒントを得た事例。

・その教材が何をねらっているか。ある字からある字に移る時にポイントになる考えがある筈。あとは個別的対応ができるようにならねばならない（アドバイスの仕方など）。

４．点字のサイズ

・Ｌサイズ点字開発の紹介。

テーマ：その他

＜事例＞

糖尿病性網膜症　40 代　女性

「点字を覚えたい」という申し出。１年くらいで２点、３点。４点までは難しい。２年次、国家試験が近づいてくる不安と読めない点字への不安。意欲の減退。書きのみで、読みは無理である。卒業後も触読への希望はある。

→卒業生へのケアが必要。

点字がとっつきにくい人に、点字は読めるんだという初期の指導が必要。

マス目、マス間が重要

マスのないところも上手に手指を動かす。２マス空けなどもチェックする。

50 音から入らず、読める文字から入る（例　イタイ）

意味のあるもの、文につながるものを先に読んでいく。

文字を読んできた人たちなのであるから、失明しても点字を読めることで、読む喜びを取り戻して欲しい。

以下、事例省略

（文責：伊藤和之）

＜D 班＞

点字指導の現状について参加者から報告を受けた後、いくつかの討議の柱（○印）を立てて進めた。

○点字学習に積極的持続的に取り組める動機付けを図るにはどうすればいいか。

・何のために点字を学ぶかという明確な問題意識を持つことができるようにすることが必要であろう。

・実際、点字触読が少しでもできると理療の学習にも自信が出る。しかし、国家試験で点字を使うためには、３時間続けて点字を使う力が必要であり、持っている力の６割で回答できるくらいの点字の力が必要である。

・点字の学習会に参加したいという気持ちを継続させることは大切である。そのためには明確な目的が必要であるが、同時に指導者との信頼関係が求められる。雰囲気づくりや励まし方も大切になる。

・練習問題が無味乾燥なものでは学習は進まない。点字をほったらかしにして内容に入っていけるような教材ができると良い。おもしろいものを探して１枚の教材で何度も笑えるようなものが良い。

・自分の書いた点字が読めると役立つし励みになる。そのためには書くことの指導も重要になる。

○理療の学習をする中で点字学習にどう取り組んでいくか。

・全員に基礎的な学習をした上で、必要な人には補習をして指導している。

・入学前に教育相談で指導している。

○点字の指導にどのような体制で取り組むか。

・担任、国語担当。

○ボランティア等から指導者を育てる観点はあるか。

・点字指導員の資格を持っていればいろいろな段階で指導ができるだろう。しかし、人間関係が上手く作れることが大切である。自分で触読をやってみようという意欲を持った人であることが必要である。上手くやれるかどうかは、関わる場面を作りながら見極めていく事が必要だろう。

（文責：吉田道広）

第２節　第２回学習会の報告

１．期日　平成 14 年 9 月 7 日（土）～ 9 月 8 日（日）

２．参加者　５６名

３．内容及び日程

9 月 7 日（土）

12:30 ～ 13:00	受付
13:00 ～ 13:20	開会式・学習会趣旨説明
13:20 ～ 14:00	点字を触ってみよう
14:00 ～ 14:45	報告（Ｌ点字について・縦読みの有効性・点字サイズについて）
14:45 ～ 15:15	日本ライトハウスでの点字指導
15:15 ～ 15:30	休憩
15:30 ～ 16:10	名古屋方式での点字指導
16:10 ～ 17:40	まずは体験してみようⅠ（演習）
17:40 ～ 18:00	事務局より・移動
18:00 ～ 19:30	夕食・休憩
19:30 ～ 21:00	ナイトセミナー

9 月 8 日（日）

7:30 ～ 9:00	朝食・荷物移動
9:00 ～ 9:05	事務局より
9:05 ～ 10:35	まずは体験してみようⅡ（演習）
10:35 ～ 10:50	休憩
10:50 ～ 11:30	楽しみながら点字を読もう（演習）
11:30 ～ 12:25	グループ討議報告及び協議
12:25 ～ 12:30	閉会式

１．日本ライトハウスでの点字指導
坂本式点字触読指導法

報告者：田 辺 正 明（日本ライトハウス）
　以下に、当日使用したレジュメのみを示す。

・・

　点字の触読の指導法は、点字を学ばれる方の触知覚の程度や、興味の度合いによって変化するものであり、様々な指導法がありますが、その 1 つの方法として、点字指導を 37 年にわたって続けてこられた坂本美磨子氏の方法があります。主な特徴をご紹介したいと思います。

１．点筆の持ち方と動き
・中指と薬指の第 1 関節と第 2 関節の間に針の部分を手の甲の方に出して挟み込む。
・点筆の動きの支点は小指の第 1 関節と第 2 関節の間で、ひねって回すように動かせる。

２．行たどりとマス動き
・人差し指を行に垂直に置き、行を左から右にたどり、点を感じ取る。
・「め」をひとマスおきに打った行で、点のひとマスの幅を感じ取る。
・人差し指がひとマスの幅で移動できるように、他の 4 本の親指、中指、薬指、小指がひとマス動きができるように、練習する。

３．読み書き同時進行
・左手（右利きの場合）は読み、右手は書きに使い、写し書きをしながら点の位置を覚えていく（鏡字の防止）。

４．点の少ない音から導入
・ア、カ、ナ、ハ、ラ、マ、サ、タ、ヤ、ワの順に 50 音を練習。

５．ケース紹介
　盲聾の二重障害の方（46 歳、網膜色素変性症、視力 R:0.02;　L:0.01、視野：中心暗点）で、訪問指導で行った過程を紹介します(2002 年 4 月から週 1 回 2 時間で、そのうちの 1 時間は歩行訓練の場合もあります)。

4/19: 点筆の持ち方、点の入れ方
4/26: 点字版の使い方
5/10: マス動き（教材 1）
5/17: 教材 1 、7 行目から 10 行目まで
5/31: 教材 1 、11 行目から 15 行目まで
6/7：教材 1 、15 行目から最後まで、ア行導入
6/14: カ行、ナ行導入

6/21: ハ行、ラ行、マ行導入
6/28: サ行、タ行、ヤ行、ワ行、ン導入
7/5：アカサタナの順に復習、清音をランダムに復習
7/12: 単語（清音）練習、濁音、拗音導入
7/19: 拗濁音導入
8/30: 単語（濁音）、短文練習

点字教材（短文）を読み、書いているところ（8/30 に録画）を紹介いたします。

点字教材、および指導方法は日本ライトハウスより発行されています、「視覚障害リハビリテーションと生活訓練」の中に点字指導法として記載されています。また、この坂本美磨子著の点字指導法の初版は日本ライトハウス発行、「視覚障害研究第 16 号（1981）」です。

なお、書籍の購入は日本ライトハウス、養成部（書籍係）までご連絡ください。

２．ナイトセミナー（グループ討議）の記録

＜E 班＞

１．参加者の構成

盲学校教諭……５名	岩手県立盲学校、奈良県立盲学校、長野県立長野盲学校、 徳島県立盲学校、佐賀県立盲学校
情報提供施設……１名	岩手県立点字図書館
事務局……２名	国立身体障害者リハビリテーションセンター、静岡県立大学短大部

２．内容

E 班のテーマは「個別指導プログラム」で、これに関心を持つ上記のメンバーが集まった。しかし実際には、自己紹介を兼ねたそれぞれの現場の状況紹介の後、点字学習時間の確保、モチベーション、関係機関との連携などについて意見交換がなされた。

⑴点字学習のための時間確保について

盲学校の専攻科では、中途失明で点字習得の必要な学生にその指導を行なっているが、多くを専門的な科目で埋められる時間割では、十分な学習時間を確保できず苦慮している。こうした中、岩手盲からは教養的な科目の時間を点字学習に当て、理療科の教員もその指導に当たっている状況が報告され関心を集めた。これに対し奈良盲からは、点字の指導には全校的に協力し、取り組む体制づくりの必要を感じるものの､学科・学部間の関係が障壁となって実現できない現状が紹介された。合わせて盲学校として言葉、文字を持つことの重みと大切さを認識し、教育することの必要性が強調された。

⑵モチベーションについて

いくつかの現場からは、点字学習者へのモチベーション、ならびに学習意欲の持続において思案しているとの報告があった。しかしこれに対する具体的な打開策は特に示されず、指導者側の共通した悩みであることが強調された。ただ岩手盲からは、点字使用学生との１コミュニケーション手段として、また臨床実習時の点字カルテ記入に向けての観点から墨字使用の学生に対しても点字学習の時間を設けていることが紹介された。岩手盲では全校挙げての点字学習の環境が生まれ、モチベーションの問題は特に見られないという。

⑶関係機関との連携等について

専攻科における科目の読み替えによる点字学習時間確保については、一部の参加者から「そこまでする必要があるのか、他機関との連携により入学前からの点字学習の導入、あるいは入学後においても、連携による学習の継続で読み替えは避けられるのではないか」との問題提起があった。そこで、参加者に地元における点字図書館等関係機関との連携について状況報告を求めたが、いずれからも具体的な事例は示されず、実践されていないことがわかった。

一方、盲学校は入学予定者または在籍者のみにサービスを提供するだけではなく、専門性を発揮し、広く視覚障害者に貢献するなどして役割を拡張すべきではないかとの意見が出された。これにより、理療の学習は別とし、失明後の早い時期からの点字学習が可能になること、また、その過程の中で理療科への進学希望が生まれた場合、従来よりも適応しやすくなるのではないかと考えられ

ることなど、点字の習得と理療の学習の関係における問題解決への可能性も話された。関連して、長野盲では今年度から「視覚障害支援センター」を開設して具体的な取り組みを始めたことが、また徳島盲においてもプロジェクトチームを立ち上げ、その準備に入ったことが紹介された。

(4)その他

事務局・管氏は、国立身体障害者リハビリテーションセンター、および全国の視力障害センターでの点字指導終了者の結果分析から、中途視覚障害者の読み速度の限界の報告をした。それによると、最も速いケースは1分間 180 字という（先天の場合は 600 字程度)。また読み速度向上のための訓練として国リハでは「スピーチオ」を活用していることの紹介があった。合わせて、読み速度を向上させていくには、しっかりとしたアセスメントとそれに基づく細やかなプログラミングの必要性が不可欠であると強調された。

（文責：立花明彦）

＜F 班＞

１．参加者の構成

盲学校教諭	・・・・・・・・・・・３名	福井県立盲学校　京都府立盲学校
盲導犬訓練施設職員	・・・・・・・・２名	日本盲導犬協会仙台訓練センター
リハビリテーション施設職員	・・・１名	日本ライトハウス
事務局	・・・・・・・・・・・・・２名	

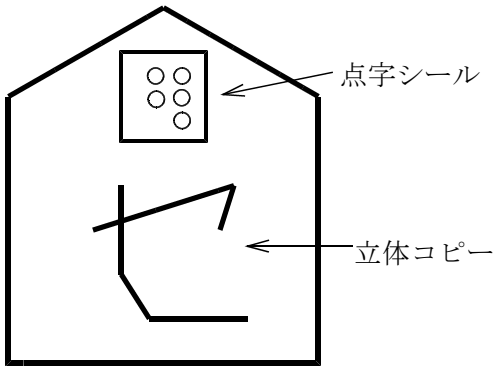
２．内容

指導法・教材の工夫のテーマのもと、情報交換・意見交換をおこなった。

（１）視神経萎縮・脳梗塞で手足に麻痺があるケース（触知覚は良いが、記憶に問題がある）に対して使用している教材の紹介があった。

立体コピーの墨字と点字シールを組み合わせたもので、墨字の記憶と点字を一致させていく。

繰り返し使用させる中で、少しずつ成果が現れてきているとのこと。山型に加工してあるのは、上下がわかりやすいようにとの配慮である。

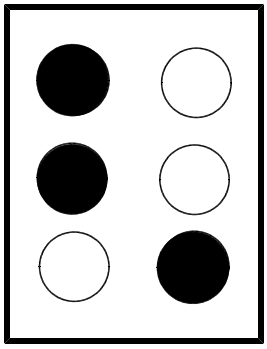


この教材の紹介を受けて、日本ライトハウスから同じようなケースについて紹介があった。そのケースは事故により、脳の文字認識に関する部分が障害を受けており、点字に挑戦はしたが、モティベーションを高めるものがなく、最終的には断念してしまったということであった。そこで、話題として、モティベーションを高める工夫について各施設等、どのようにおこなわれているか話し合われた。はじめに紹介のあったケースでは、受障以前より文通をしていたため、もう一度文通がしたいという強いモティベーションがあったとのこと。

（２）京都府盲より、総合的な学習の時間（お互いの障害の理解）で使用した点字カードの紹介があった。全盲の生徒と弱視の生徒が混在するクラスでの取り組みで、全盲の生徒が点字を弱視の生徒に教える中で、お互いの障害の理解を深めることを目標にした取り組みとのこと。

１００円ショップで売っている家具の傷防止用の丸いシールをボール紙に貼りつけ、点字を作成するというもの。厚みがあり、触っても楽しめるとのこと。

他の参加者からは、裏に墨字を書き入れるとよいのではとの意見がだされた。

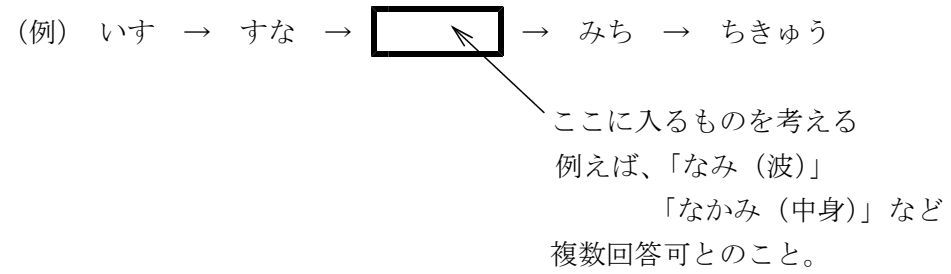


（３）全体的な討議

最後に、本来なら、次の日に紹介される予定の『おもしろ教材集』を参加者に見てもらいながら、おもしろ教材について討議を深めた。

参加者が口をそろえて言っていたことは、やはり『おもしろ教材』のようなものは絶対必要であるということであった。その理由としては、触読プログラムのようなもののみで取り組んでいるとモティベーションも下がりやすいが、『おもしろ教材』を導入することによってモティベーションを維持することができると思われるとのことであった。

具体的な例としては、日本ライトハウスでは、女性同士でカレーの材料を書き合い、それをお互いに交換して読んだり、福井盲では、しりとりとクイズを組み合わせた『おもしろ教材』を使用しているとのことであった。（下参照）



また、『おもしろ教材』のその他のアイデアとしては、ワールドカップの選手の名前、好きな映画俳優の名前（ただし、特殊音が多いなどの指摘もあった。）などが出され、クロスワードパズルも、あれば是非教材として活用したいという意見が多く出された。

（文責：正井隆晶）

＜G 班＞

テーマ：　指導法・教材・教具

参加者：盲学校３、リハ２、事務局２

・教材、教具

独自教材を持っている：２

独自教材を持っていない：３ → 名古屋リハセンプログラムを利用

・指導方法

読み方向

・先天盲 → 縦読み指導は基本的にしない。

・中途失明者 → ヨコ読み指導から導入するが、縦読みの禁止はしない。

個別化

・ガイドラインは必要だが、マニュアルに完全に頼るのではなく、個に応じてかえる必要がある。

・個人のゴールをどこに置くかを考えることが重要で、どれくらいが個の実用となるか（例：200/1min:理療科）のアセスメントが必要

モーチベーションの多様化

・表音文字としての点字以外にマークとしての利用。

・短歌を作る、電話番号や名前付けなどニーズに応じ、限定した使用方法を考える。

集団指導と個別指導

・個別指導を行っている施設がほとんどであるが、集団指導においても能力に応じたクラスの再編成、補習などのフォーローが行われている。

・点字のサイズ

初心者にはＬサイズは分かりやすい。

大きな点字から小さな点への移行をどうするか。指導時間の問題がある。

中途失明者の人が読みやすい環境を作ることが必要。

（文責：田辺正明）

＜H 班＞

テーマ　「指導者として」

１．対象者である中途視覚障害者と良好な人間関係を築くこと。

指導に当たる上での第一歩として、まず相手（中途視覚障害者）の方が置かれている状況や本人の気持ちを充分把握すること、そのためにはよく相手の話を聞き、相手の身になって考え理解するよう努力すること、このことにより指導者と訓練生との間に良好な人間関係を築くことができる。

２．訓練生個々のニーズに応じた点字指導の目標設定をする。

生活環境、年齢、将来の目標等訓練生個々の状況によってニーズも異なるため、それぞれのニーズに応じた点字指導の目標を設定することが必要である。

３．点字指導への動機付けと訓練意欲の促進

点字訓練、特に触読訓練は、訓練生にとって過酷なものであり、また、失明による精神的苦痛もあり、なかなかスムーズにすすまないことが多い。この点を克服するためには、点字を読み書きすることの必要性とそれができることによる喜び、自信につなげていくための動機付けを行うこと、楽しく点字を学べる状況を作っていくよう工夫を凝らすことである。

４，点字が読めるだけでなく、意味を読みとれる（読解力をつける）指導を心がける。

点字を三療師免許取得のための国家試験受験学習に使用しようとするとき、かなりの読速度と読解力が要求される。

特に読解力をつける指導は最も重要で、読んだ内容を充分理解させるために指導方法や教材作成に工夫を凝らしている。

（文責：小林貞良）

第３節　第３回学習会の報告

１．期日　平成 15 年 8 月 9 日（土）～ 8 月 10 日（日）

２．参加者　５０名

３．内容及び日程

8 月 9 日（土）

12:30 ～ 13:00	受付
13:00 ～ 13:10	開会式
13:10 ～ 14:30	各施設での点字指導の様子 国立身体障害者リハビリテーションセンター 東京ヘレンケラー協会
14:30 ～ 14:50	L 点字について
14:50 ～ 15:10	点字サイズの違いによる触読の比較から分かったこと
15:10 ～ 15:30	休憩
15:30 ～ 16:00	「点字入門」について
16:00 ～ 16:30	名古屋方式での点字指導
16:30 ～ 16:50	点字指導事例
16:50 ～ 17:00	指導者用 CD 作成について
17:00 ～ 17:40	まずは体験してみようⅠ（演習）
17:40 ～ 18:00	事務局より・移動
18:00 ～ 19:30	夕食（懇親会）・休憩
19:30 ～ 21:00	ナイトセミナー（グループ討議）

8 月 10 日（日）

7:30 ～ 9:00	朝食･休憩
9:00 ～ 9:05	事務局より
9:05 ～ 11:20	まずは体験してみようⅡ（演習） （各班適宜 15 分程度休憩を入れる）
11:20 ～ 12:25	グループ討議報告及び協議
12:25 ～ 12:30	閉会式

１． Ｌ点字について

（1）L 点字の紹介

報告者：藤 野 克 己（視覚障害者生活情報センターぎふ）
　以下に、当日使用したレジュメのみを示す。

・・・

１．神奈川県における中途視覚障害者点字指導の始まり

２．L サイズ点字の目的
　⑴主に中途視覚障害者の文字の回復（点字使用者の増加）
　⑵利用者が選択できる環境

３．L サイズ点字の規格
　⑴ ４種類の点字の規格

機器の種類	メーカー	１－４	４－１	１－２
標準点字器	仲村点字器製作所	2.13mm	3.27mm	2.37mm
ESA721	ｼﾞｪｲ･ﾃｨｰ･ｱｰﾙ	2.0mm	3.2mm	2.25mm
27 マス点字器	仲村点字器製作所	2.4mm	3.6mm	2.8mm
L サイズプリンター	ｼﾞｪｲ･ﾃｨｰ･ｱｰﾙ	2.4mm	3.8mm	2.75mm

　⑵ L サイズ点字プリンターの条件
　　ｱ．１ページ１８行、１行３２マス（標準サイズと全く同じ）
　　ｲ．インターライン
　　ｳ．B ５判を A ４判にして、点間（１－４、１－２）及びマス間（４－１）を広げる。
　　　（実際には、８×１０インチ → １０×１１インチ）
　＊標準サイズの点字と同じレイアウト

４．L サイズ点字製作の状況
　　ｱ．「ふれあい　くらしと県政」（岐阜県発行）2002 年 5 月号から（42 部）
　　ｲ．「広報ぎふ」（岐阜市発行）2003 年 4 月号から（12 部）

５．L サイズ点字の効果
　　ｱ．従来ならあきらめていた人たちが点字を習得
　　ｲ．高齢等のために標準サイズ点字を読めなくなった人が点字を回復
　　ｳ．点字使用人口の増加

６．今後の展望

ｱ．視覚障害者情報提供施設

ｲ．点字出版所

ｳ．点字サイン

・・・

（2）L 点字での指導

報告者 : 原　田　良　實　（名古屋市総合リハビリテーションセンター）

Ｌ点字について

点字プリンターＥＳＡの発売元のジェイ・ティー・アールから平成１３年暮れ、Ｌ点字プリンターが発表された。Ａ４版の用紙に３２マス、１８行の印字ができ、従来のデータがそのままプリントできる。Ｂ５サイズからＡ４サイズへの拡大であるが、点字そのものは完全な比例の相似形という訳ではない。

標準サイズより大きな点字は､欧米の点字プリンター出力やパーキンス等の点字タイプライター、仲村製の２７マス点字器等があるが、どれも中途視覚障害者の点字習得や読書として定着したものではなかった。

名古屋市総合リハビリテーションセンターでは、教材印刷をジェイ・ティー・アールに依頼し、Ｌ点字での点字指導を平成１４年度から実施している。Ｌ点字は「予想通り」に学習に有効であるという実感を得た。下記の読み評価に見られるように、標準点字の読みの遅い人ほどＬ点字が効果的であることがわかった。評価１に見られる女性の場合、標準点字での１頁の読み速度が８分程度であり、この当たりが標準点字かＬ点字かの分岐点かと思われる。この、１頁８分の読みは、体験的な実感では、縦読みから横読みの速読法への切り替え時期でもある。１頁の読みに１０分以上が必要な場合、横読みは負担が大きく無理となるとともに、標準点字よりもＬ点字での学習が効果的であることを改めて実感した。

① 読み速度の遅い人ほどＬ点字が効果的

点字読み評価　１（１分間）

	標準点字	Ｌ点字
男・４０代・脳腫瘍	１０	２６
男・５０代・糖尿病	８	１６
女・４０代・色変	５４	５４

点字読み評価　２（H14.8.28　13 名）

Ｌ点字の方が早い　　８名

（平均　１５２％　　最大　２８８％）

Ｌ点字の方が遅い　　４名

（平均　８３％　　最小　５９％）

② Ｌ点字指導最初の事例

○男・２６歳・脳腫瘍・右マヒ

○Ｈ１４　スキーで転倒・右前頭葉強打・意識不明→視力低下

○心理判定（高次脳機能障害）

知的：ボーダーレベル

記憶：ノーマル下限

注意：障害レベル

○１４年８月１日入所

８月５日～１９日（１２日～１６日夏期休暇）

２０日「うらしまたろう」評価

１ページ　３１分１０秒

２ページ　３３分

③ Ｌ点字器

（株）大活字と名古屋ライトハウス盲人情報文化センターの共同企画で、Ｌ点字器の製作・販売が、平成１６年１月末から始まっている。これで、書いてもなかなか読み返しに苦労していた人たちにとって、読みやすくなり、日常生活の中で点字を活用する場面が増えていくことだろう。

２．ナイトセミナー（グループ討議）の記録

＜I 班＞

１．参加者の構成

盲学校教諭……４名	三重県立盲学校　島根県立盲学校
	山梨県立盲学校　京都府立盲学校
リハ施設……１名	京都ライトハウス鳥居寮
事務局……２名	日本盲人会連合　静岡県立大学短大部

２．内容

この班のメンバーは、テーマ「個別指導プログラム」「指導のための教材」に関心をもつ人々である。自己紹介を兼ねたそれぞれの現場の状況紹介の後、テーマに基づき次のような意見交換が行なわれた。

(1) 点字学習のための時間確保について

盲学校の中には、点字学習のための時間確保に苦慮しているところがあり、これを解決するためのアイデアを求める声があった。特に「自立活動」の時間がない生徒の場合は厳しい状況であると言う。これに対し、寄宿舎での生活時間の一部が活用可能になれば、ある程度カバーできるのではとの提案があった。しかしそこでは、寄宿舎指導員の協力が不可欠であり、同時に一貫した点字指導態勢を全校的に築くことの必要性が指摘された。

(2) 点字入門時のテキストについて

初期の点字学習では、どのようなテキスト、教材を提供するかが話題となった。

盲学校の中には、名古屋リハセンター製作の「点字読み教材」を利用しているところがみられた。一方、京都ライトハウス鳥居寮では、独自の教材を製作し、使用しているとの報告があった。それは、学習者の強い触圧にも摩滅しにくいようサーモフォームを用いたもので、触読に考慮し、パーキンス製点字を採用している。また清音の提示順序は五十音順ではなく、文字の把握が容易なものからになっているとのこと、学習者の状況に合わせ、適宜変更する細やかな対応は、参加者の関心を呼んだ。

(3) 早読み移行時の教材について

早読みのトレーニング法については、日中のプログラムの中で既に管氏がプレゼンテーションをしているが、これとは別にどのような教材、方法が効果的か意見交換がなされた。ここでは、

- ●中学・高校生では、教員との間で手紙の交換を繰り返すなどは、動機付けの維持の面からも有効的であった。
- ●カラオケの歌詞を点字にし、教材とする。学習者が知っている曲の場合は、ある程度の推測読みや、苦手とする文字の確認にもつながる。上達具合によっては、カラオケに合わせて歌うこともでき、一定の効果がみられた。

などの試みが報告された。

(4)個別プログラムについて

盲学校では、個に合わせた教育が推進されている。そうした流れに伴い、点字指導においては、各学習者に合わせた年間の指導プログラムを作成すると同時に、学習前にそれを提示することが求められるのではないか。またそのためには、学習前の評価をしっかりと行ない、それに基づいた指導プログラムを示し、学習後の到達レベルをも予測し説明できるような指導システムを構築する必要があるのではないかとの意見があった。一方、本年４月から支援費制度が実施され、リハはその対象になっている。このためリハ施設では、従来以上に利用者へ訓練の内容、予想される訓練結果などを可能な限り伝え、訓練生の納得を得る必要に迫られる。したがって、訓練前の初期評価と個別指導プログラムの作成は必須であり、早急に取り組まなければならない課題の一つと言う。このように、盲学校･リハ施設共に指導プログラムの必要に迫られている背景が紹介されたが、時間的な制約から、これ以上の意見交換はできなかった。

(5)その他

日中のプログラムで、L 点字プリンターについてのプレゼンテーションがあったが、これに関してのさらなる情報を求める声があった。このプリンターについて強い関心があるようで、盲学校・リハ施設共に発売時には予算を確保し購入したいとの姿勢を示した。

（文責：立花明彦）

＜J班＞

参加者：７名

盲学校高等部　盲学校中等部　盲学校理療科(２名)　国立施設(２名)　ボランティア

１.各校・施設の現状

(1)盲学校高等部(大阪)

現在、大学在学中の女子の事例：中学２年次に失明。引きこもり２年の後、大学進学希望があったためその手段として盲学校に編入。親、本人とも積極的な動機がないため、盲学校での生活に馴染めない。点字、歩行訓練ともに抵抗感を示す。コンピュータやテープを活用できるため積極的にならない。最終的にはどの訓練も目標を達成して卒業、進学をしたが、もう少し学校側としての対応ができたのではないかと悔やまれるケースである。

今後、このような中途失明の生徒が入学してきた場合、どのようにしてモチベーションを高めていくのかが課題である。

学校の中で、点字のできる教員が少なくなっている。各部との連携、部内の連携がとれない状況がある。

＜参加者からの意見＞

生徒が抵抗感を示していても、最終的には点字も歩行訓練もクリアしているのだから、学力の高い生徒であろう。今後の学生生活また次の就職等に直面して、人生設計等、今度は自分で考えることになるのではないか。

(2)盲学校中等部(福井)

中途失明の女子(３年生)の事例：右 0.02 左手動弁。視野 10°。視力が落ちたのが中２の時。点字は名古屋リハセンの教材。3/4 ほど進んだが、本人のモチベーションが上がらない。周りの生徒の学習状況と比べて自分の現状をもどかしく感じている。

指導ももっと集中して充実させたいのだが、その時間的余裕がない。他教科の授業と並行で点字指導等を行うことが難しい。

(3)盲学校理療科(山梨)

５４歳の方が２名。３６歳の方が１名。高齢化に伴い、点字習得に身が入らないということや理療と並行で点字を学習することに困難が生じている。理療科２４名の中でこれらの人に対して、自立活動の時間で普通科と協力して、理療科目の裏(１ h)、放課後、夏季休業中の指導を行っている。試験対策で表記だけでもよい場合がある。また、自分より年上の人に教えるのに難しさを感じる。

(4)盲学校理療科(岡山)

３６歳の方。読みの指導。本人の興味を引き出していたところ、金子みすずに関心のあることがわかり、現在指導継続中。

(5)国立施設(塩原)

高等課程の方で、指導の工夫によって、授業に乗ってきて、職人気質のように点字を習得していくという可能性がある。また、クラスに中核になる人がいるとモチベーションが上がりやすい。

２.意見交換

⑴集団の中で読むことによって、その力動が大きく作用することが多い。名古屋リハセンでは学期制ではないので、何月入所であっても受け入れる。そうすると、先輩が自分の辿ってきたことを後輩に教えるというようなことが自然と行われる。

盲学校でできることはまだあるのではないだろうか。自分も現在熊本でボランティアを行っているが、盲学校の普通科の教員に縦読みを紹介した。少しずつでも連携を広げていく必要がある。たとえば、地域の点字図書館などに相談するのもひとつの方法である。

⑵各地に医療、福祉、リハの施設や人がいるので、情報収集を勧める。物的人的資源の活用と連携がこれから更に重要であろう。盲学校のセンター化構想、特別支援教育の方向性はそれを推進するものとして注目している。

（文責：伊藤和之）

＜K 班＞

モチベーションを高めたり維持できる教材に関する話題から話し合いに入った。

（教材について）

○成人者の指導で、以前は本を読むことはあまりなかったようだが、点字を学習するようになってエッセーを読んでいる。１行を１分くらいで読むようになった。

○自分が点字を習ったときには、最初に読みを徹底して教えられた。これまでに経験したり使用した教材は、アンケートに書いたとおりだが、カードにした教材は文字の量が少なく感じて読みやすい。また、厚紙だったら点がつぶれないのも利点。若くて感覚がするどい時期であれば、薄い点字を読んでみることもいいのかもしれない。

○童謡の歌詞など推測読みがしやすく、長すぎず難しすぎないものをさがしている。

○ピンディスプレーの文字は初心者も読みやすい。

○子ども向けに作った教材でも大人に使えるものもある。

（点字学習の目標や意義について）

○生活環境等によっては点字の学習をはじめても目標がたてにくかったり、達成に意欲が維持できなかったりする。

○点字を学習する場合、学習の間隔があいて習得が難しいことがある。また、文字学習のみに陥ってしまって、ことばが学習できていないことも見られる。日常的に点字に触れて、ことばの学習として成果が出るような学習がよい。例えば、生徒が書いたものに、指導者がコメントを入れて返すようなことは、今の盲学校の生徒数だったら十分に可能だろう。教室で点字盤の音が日常的に聞けるような環境がほしい。

○点字の指導に熱心になるあまり、方法と手段を取り違えてはいけない。点字はあくまでも方法。

（指導法について）

○「盲学校の中で、縦に指を動かす指導は大きな声で言わない方がいい」と言われた。

○一つの方法にこだわらずにニーズに応じて最適な方法を使えるようにすることが大切である。

○いろいろな指導法があるが、それぞれの指導法に学ぶべきことがある。

○リハと盲学校に指導法の違いがあっていいと思う。日本ではリハの指導法を盲学校に適応しようとしている。教えている対象が違うから盲学校独自の指導法が必要だろう。

（理療科生徒の指導時間確保）

○理療科生徒の点字学習時間の確保ができない。（入学時にはほとんどがリハで習得しているという紹介もあった。）

○国家試験に主眼をおいて、名前と数字に限ってみるのもいい。

○点字に触っている時間を長くすることが大切であるので、放課後の指導や寄宿舎での指導が充実できるといい。

○寄宿舎で指導をしている。「寄宿舎指導員」になったので指導が可能になった。学校でもＴＴ（ティームティーチング）で指導をしているし、学校の指導と連携して寄宿舎でも指導をしている。

（Ｌ点字について）
○プリンターが高価なので、購入となると・・・。
○紙が大きくなり（Ａ４サイズ）、いいかもしれない。（かさばるという意見あり。）
○使いやすさ等検証が必要な面もある。

（文責：吉田道広）